archive

vol.29

A-Lab archive

A-Lab ☑ Exhibition Vol.27

普通の日

An Ordinary Day

YU SORA

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.29

普通の日

An Ordinary Day

目次

■ 出展作品 1

■ 寄稿 「見つめ直される日常」 天野太郎 13

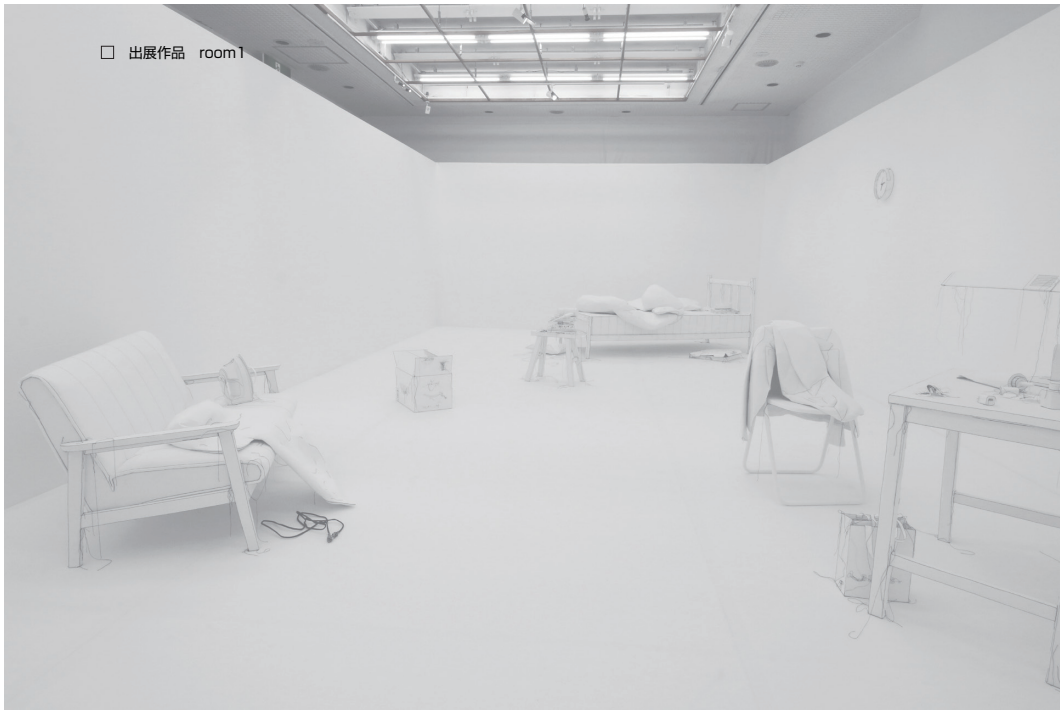
■ 無人ワークショップ 「私たちの住んでいる家」 15

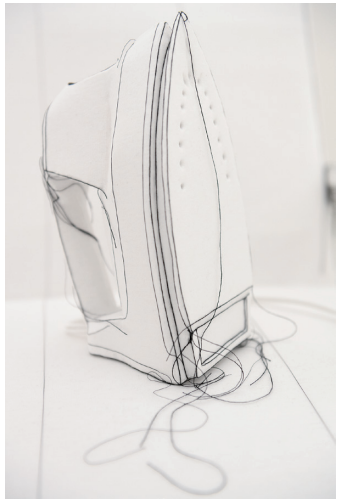
■ アーティスト・インタビュー 17

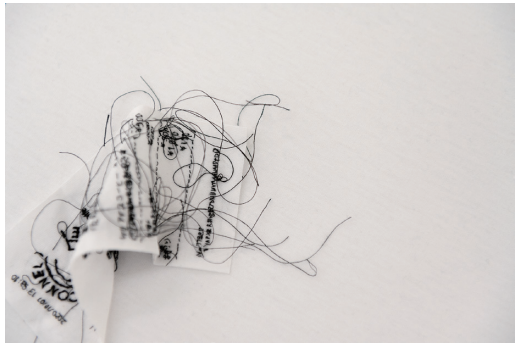
■ フライヤー・配布資料 33

□ 出展作品　room1

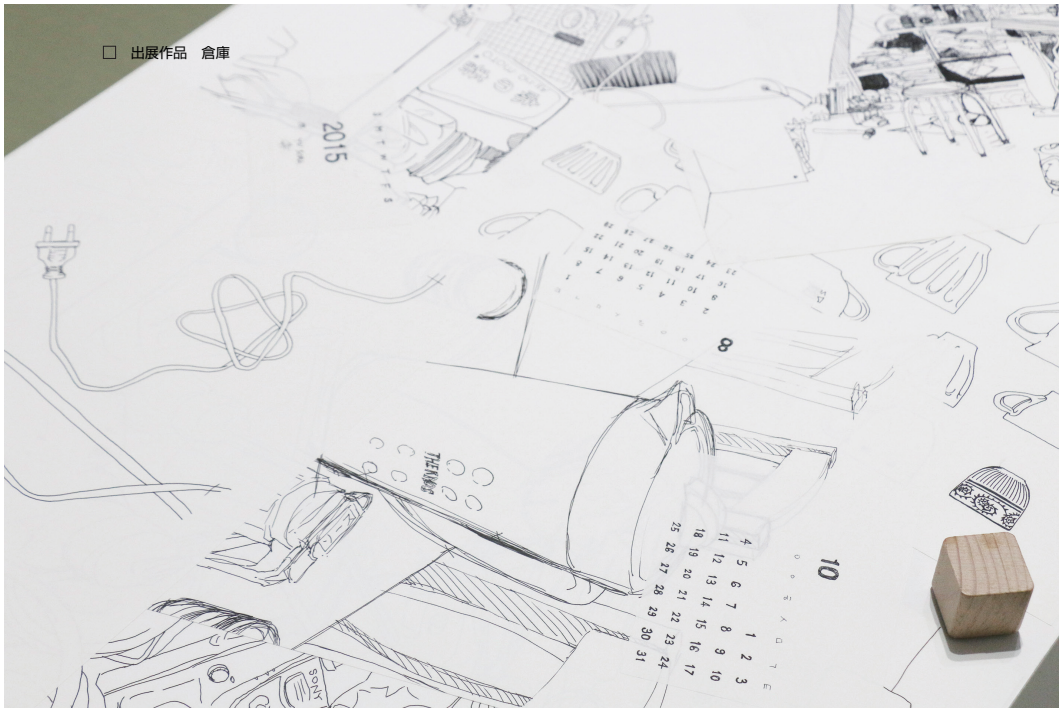
□ 出展作品　room1

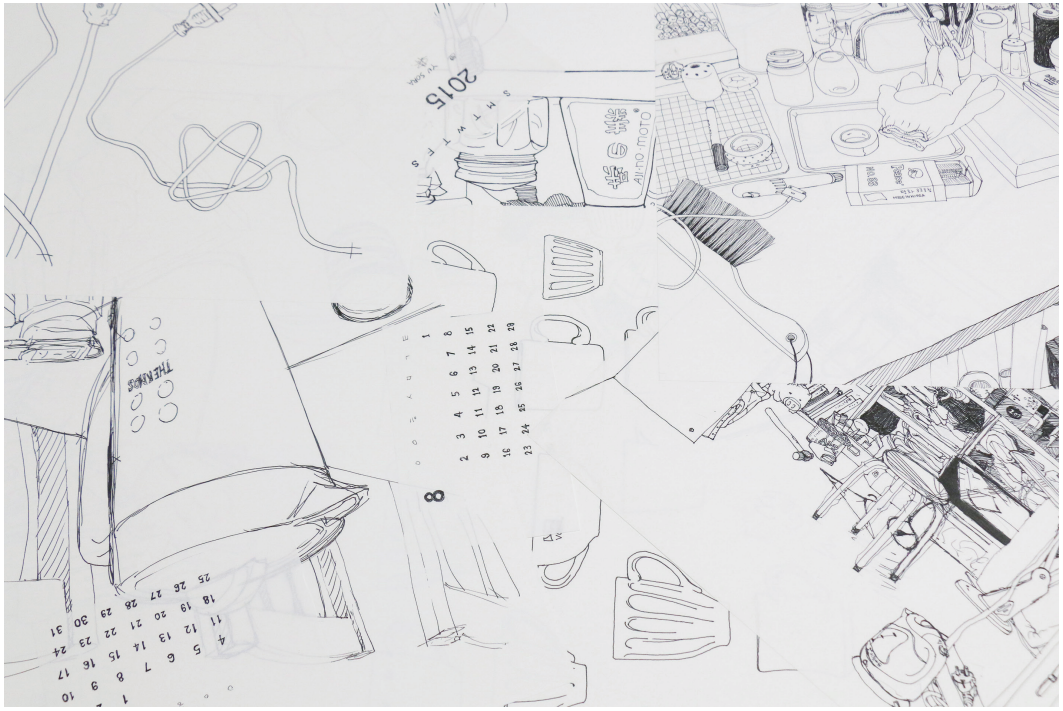




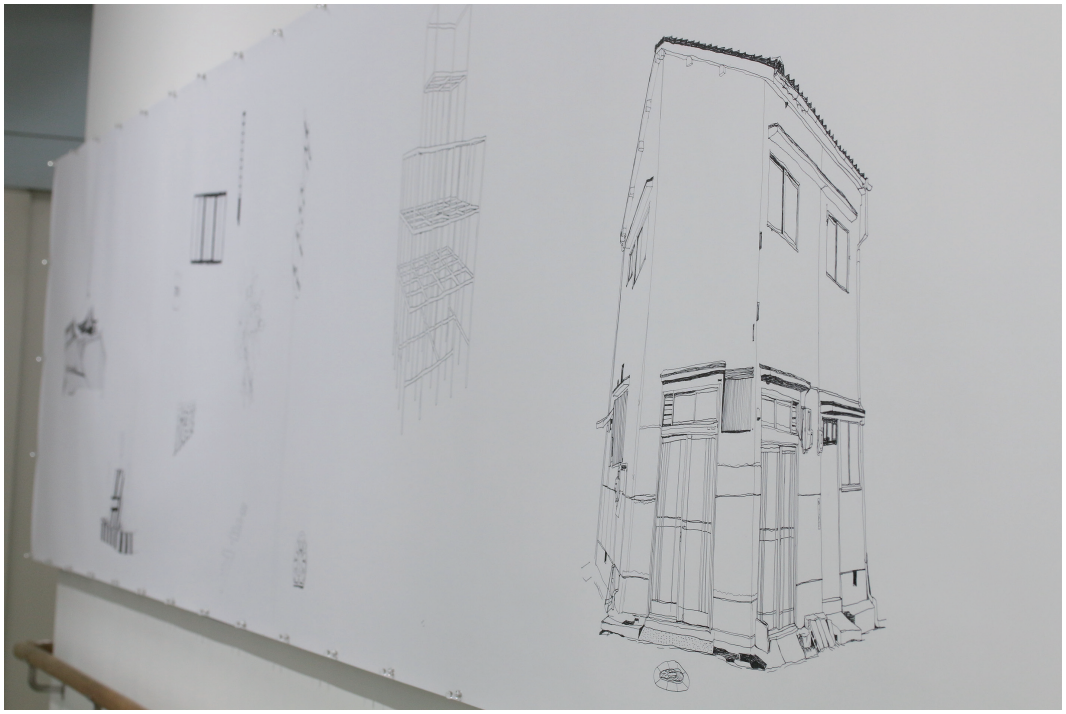


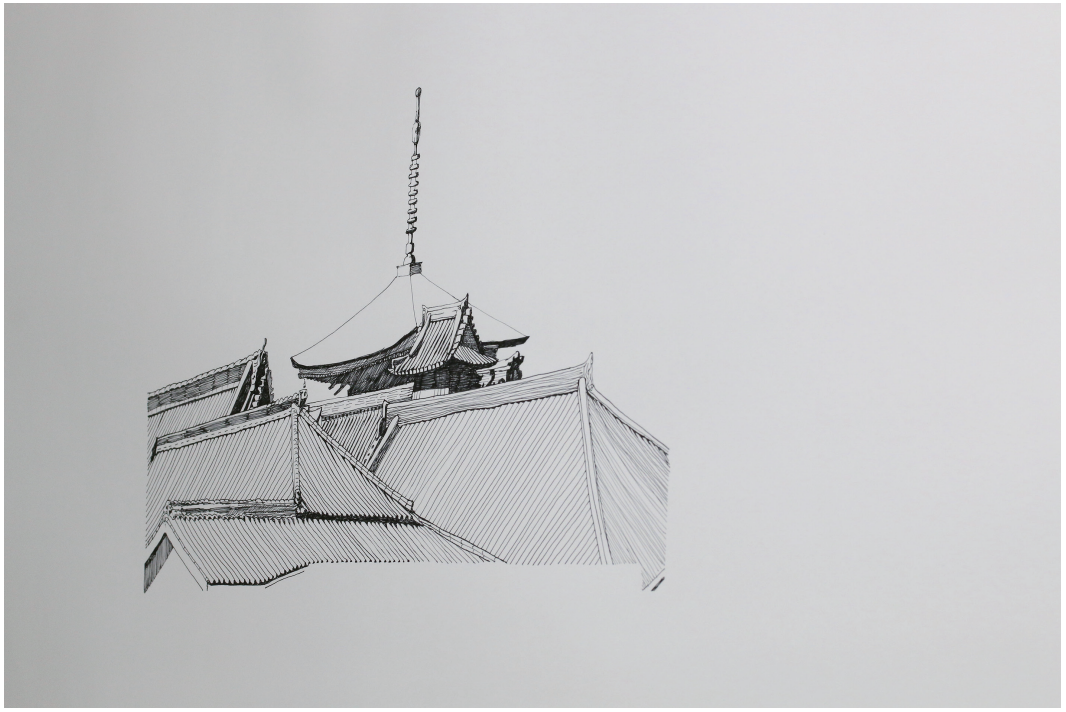
□ 出展作品　倉庫



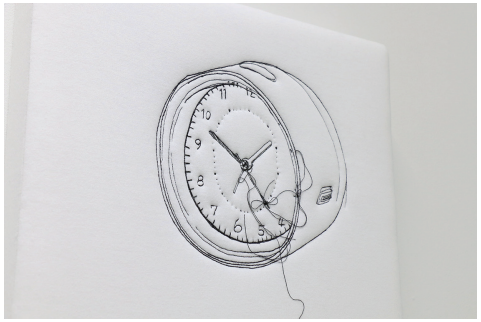


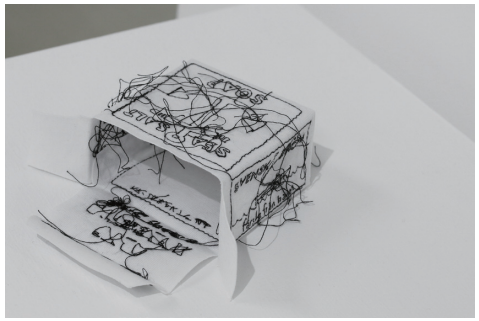
□ 出展作品 廊下



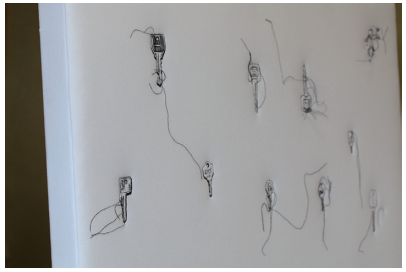


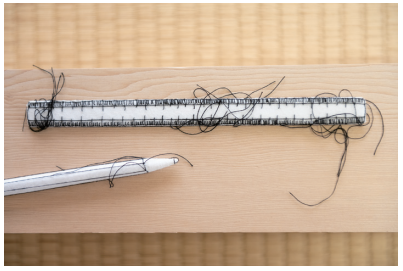
□ 出展作品　room3





□ 出展作品　和室





寄稿　「見つめ直される日常」　天野太郎 (インディペンデント・キュレーター)

ユ・ソラは、韓国の大学で美術（韓国の大学には複数専攻という制度があり、ユは、繊維美術ファッションデザイン科と彫塑科を卒業）を学び、その後、東京藝術大学大学院彫刻科を修了し、その流れを汲みながら立体的な作品を制作している。実は、韓国の大学では、最初にファッション・デザインを学ぼうとしたが、デザインそれよりも実際にモノを作る方へ興味が移行して彫刻を学ぶことになった。

今回の出品作の制作年は、2012 年から最新の 2021 年に及んでいる。韓国の大学を 2011 年に卒業し、東京藝術大学を 2020 年に修了しているので、ほぼその間に制作された作品ということになる。
ユが、彫刻を学んできたことは既に触れたし、実際に今回の出品作にも、木彫の作品が「帰るところ」（2019）など数点あるが、その他の作品は、伝統的な意味でも彫刻とは別の文脈を有しているように思える。彫刻の作品として自立したものではないこと、素材の混合性（mixed media）であることなどが主な理由である。一点一点が独立した作品もあるが、いつくかの立体によって構成されている「普通の日」（2019-2021）は、インスタレーションそのものが一つの作品として示されている。
また、作品に、白地（木綿のニット地が基本で、シルク、ポリエステルの混紡も使用）の支持体の中に中綿を入れ、そこで生まれた面に黒い糸が縫い込まれているのも特徴的な点である。既成の支持体ではなく、自らが作り出す過程を踏んでいるのも、後述するが興味深い点だろう。

ところで、今回の個展のタイトルは、「普通の日」となっている。実は、これまでの作品のタイトルを見てみると「帰るところ」、「些細な記念日」、「引っ越し」といったように、日常生活に纏わる言葉が多いことに気づく。何か日常から離れたテーマを設定して、それに従って未知の領域に踏み込み素材を集めるのではなく、あくまでも日常の生活の範囲の中で得たアイデアやモチーフを作品化している。

こうした普段の生活、日常の生活への眼差しは、ユのこれまで遭遇した幾つかの「事件」が大きく関わっている。中でも、2011 年に大学の卒業展でもあった韓日合同卒展で横浜に来日したときに、3.11 の東日本大震災を経験したことだった。当時震災を経験したものであれば誰もがそうだったと思うが、東北で一体何が起きたのかは時間が経過して事後的に知ることになった。ユも、その頃は、まだ日本語の理解が出来ず、結局帰国後何年もかけて事の次第を認識することになった。もう一つは、2014 年に韓国の大型旅客船「セウォル（世越）」が仁川からチェジュ島に向かう途中の全羅南道珍島郡の観梅島沖海上で転覆・沈没した事故だった。おりしも多くの修学旅行の高校生が乗船しており、乗員 470 名余りのうち、大半の 300 名近くが亡くなった韓国史上最も悲惨な事故の一つとなった。しかも、事故の様子が、テレビなどを通じて報道され、死を覚悟した学生が家族に送った携帯からの画像の配信も、ユ自身自宅に居ながら何も出来ない事の無力感を感じさせることになった。ここでも、大勢の死者が、その家族や家族の居る家への強い思いを抱きながら死を迎えざるを得ない事態が、その後のユの日常＝平安への思いを刻むことになった。

こうした言わば事件のみならず、凡庸なる日常そのものがユにとって作品制作を続ける重要な動機付けでもあり、モチーフともなった。とりわけ、2007 年に雑然とモノたちが置かれた自分の部屋をボールペンで描いたのが、「日常」を取り上げることになった最初の作品であり、同時に、そのボールペンで描かれた線が、その後、ボールペンではなく綿やシルクやポリエステルといった糸によって描線を表現するようになる。それは、実際に使用している布も含め、より日常の生活を想起させるからという理由だった。先に触れたように、ユは、作品の素材を出来るだけ自身で制作している。そして、

糸も意図的にほつれを生むことで、鑑賞者の移動よって、かすかに動くそのほつれが、日常という当たり前の風景ながら、ちょっとしたことで危うい事態を招くことを暗示している。

自明だが、日常という言葉には、それを享受する当事者の存在が不可欠だ。自分自身の風景である日常が、しかし、ここでは、ユの提案する「日常」によって俄に少し距離を置いた世界として示されることになる。時間が淡々と流れる日常をしかし、改めて、見つめることを人はしない。しない、というよりは、するための契機はやがて訪れることも確かなことだ。身に降りかかる不幸も含め、途端に馴染みのある風景がよそよそしい佇まいを見せることも事実であり、あるいは、自分の持ち物である様々な日常のモノがその所有者を失うこともまた想定される事態だろう。

今回、偶然とは言え、コロナ禍での展示となり、ユ自身というよりは、この展覧会の受容者側にとって、明らかに普段の「普通の日常」を前提とした鑑賞とはならなかった筈だ。展示室入り口に設けられたコーナー「私たちの住んでいる家」では、参加者が日常生活の場所を振り返り、住んでいる部屋の間取り図を描くワークショップが設置されている。ここでも、改めて見慣れた、そして振り返ることのなかった日常を考え直す契機が用意されている。

ユの一見穏やかな表情の作品は、人の営みの僅かな変化で生まれる精神的あるいは肉体的な騒めきを、穏らだからこそ、より深く我々に刻ませることになる。

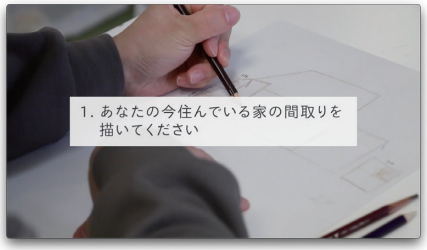
天野太郎（あまの たろう）

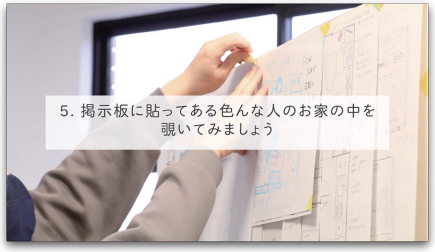
横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員／札幌国際芸術祭 2020 総括ディレクター／多摩美術大学、国士舘大学、城西国際大学、女子美術大学非常勤講師。美術評論家連盟所属。
北海道立近代美術館勤務を経て、1987 年の開設準備室より横浜美術館、横浜市民ギャラリーあざみ野で国内外での数々の展覧会企画に携わる。2021.4 よりインディペンデント・キュレーター。

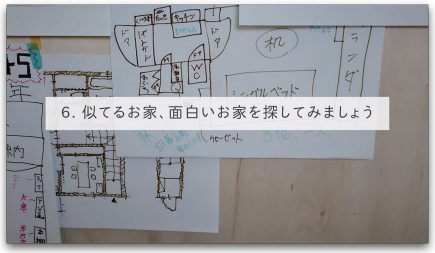
主な展覧会
「ニューヨーク・ニューアート チェース マンハッタン銀行コレクション展」(1989 年)
「戦後日本の前衛美術」展 (1994 年、横浜美術館)
「森村泰昌展　美に至る病―女優になった私」(1996 年、横浜美術館)
「ルイーズ・ブルジョワ」展 (1997 年、横浜美術館)
「奈良美智 I DON’T MIND, IF YOU FORGET ME.」展 (2001 年、横浜美術館)
「ノンセクト・ラディカル 現代の写真 III」(2004 年、横浜美術館)
「横浜トリエンナーレ」(2005) キュレーター
「アイドル!」(2006 年)
「金氏徹平：溶け出す都市、空白の森」展 (2009 年、横浜美術館)
「横浜トリエンナーレ」キュレーター (2005)、キュレトリアル・ヘッド (2011 年、2014 年、横浜美術館)
「第 3 回札幌国際芸術祭 2020」(2018-2021) 統括ディレクター

□ 無人ワークショップ 「私たちの住んでいる家」

日程　2021 年 2 月 23 日～ 3 月 31 日
時間　月・水～金　午前 11 時～午後 7 時 / 土・日・祝日　午前 10 時～午後 6 時
場所　あまらぶアートラボ「A-Lab」ロビー







日常を見つめ直す展覧会「普通の日」の会場で、参加者が自らの日常生活の場所を振り返り、
住んでいる部屋の間取り図をそれぞれ描きます。広さを間違えたり、描き忘れるスペースがあるかもしれません。
普段の生活の中で見ているからこそ、分からなくなってしまうこともあります。
じっくり考えて描いたり、家族で話し合いながら描いたり、いつもの生活をしている場所の見方が変わるでしょう。

A-Lab Artist Interview

YU SORA (ユ・ソラ)

© Kato Hajime

1987 韓国、京畿道生まれ
2011 弘益大学 (Hongik University) 彫塑科 / 繊維美術・ファッションデザイン科 卒業
2020 東京藝術大学・大学院美術研究家彫刻専攻 修士過程修了

個展
2018「些細な記念日」、Gallery Lotte、ソウル
2018「普通の日」、Stay gold、ソウル
2017「引越し」、YCC Gallery、横浜
2015「ソウル暮らし」、gallery IAng、ソウル
2014「Do not miss the moment」、Cy Art Space、ソウル
2013「うまく散らかされた部屋」、gallery41、ソウル
2012「日々、結う」、H.P.FRANCE window gallery、東京
2010「my place」、Alternative Space Art forum Rhee、ブチョン

主なグループ展
2020「Art Award Tokyo Marunouchi」、新丸ビル、東京
2019「彫刻の家」、旧平櫛田中邸、東京
2019「café in Book」、AK Gallery、スウォン
2019「中山英之展 , and then」、TOTO ギャラリー間、東京
2019「六本木アートナイト 2019」、Tokyo Midtown 六本木、東京
2018「アトリエの末裔あるいは未来 EXTRA」、旧平櫛田中邸、東京
2018「Tokyo Midtown Award 2018」、Tokyo Midtown 六本木、東京
2018「A CUP OF COFFEE」、63 sky art 美術館、ソウル
2017「木のシンギュラリティ」、旧平櫛田中邸、東京
2017「シブヤスタイル」、SEIBU 渋谷、東京
2015「無心」、ソマ美術館、ソウル
2015「日常の家」、イルヒョン美術館、ヤンヤン
2015「Rolling 1942 Project」、art space 保安、ソウル
2015「Look At」、Bunkamura Box gallery、東京
2015「黄金町通路 :revist」、siteA gallery、東京
2014「Moving Triennale made in BUSAN」、釜山沿岸旅客ターミナル、福岡アジア美術館 外
2014「アートと目が合う瞬間」、SPIRAL garden、東京
2014「Young Artist Exhibition」、イルヒョン美術館、ヤンヤン

展覧会タイトルについて。

「普通の日」というタイトルは、私がこれまで作品を作っている中でよく使っている言葉で
当たり前のように存在しているものや、普通に生きているということを大切にしていこうという
想いを込めています。

今回は特にコロナ禍の中で「家」の意味が変わってきていると思います。
1 年前、私の大学院修了作品には「帰るところ」というタイトルをつけました。

それは「家」という、いつでも帰れる場所があることの大切さを考える作品だったのですが
今はそれが帰れるというよりも、いつもいる場所になっていますね。

それぞれ自分の場所や日常生活などをどう思えば良いか。
今までの普通の日、今の普通の日、これからの普通ってなんだろうと。

展示構成について。

展示は 4 つの部屋と廊下、そしてロビーのワークショップのスペースで
構成されています。

最初の部屋は立体作品のインスタレーションです。立体作品が置かれた
真っ白い部屋全体が一つの作品になります。作品の中を歩きながら
鑑賞者それぞれがご自身の日常を見つめ直すという作品です。

2 番目の部屋には今までの私の作品の基になっている、
紙のドローイングがあります。「日々を重ねる」という言葉のように、
ドローイングを重ねて展示をしています。その部屋を出ると廊下に
私が尼崎の街を歩いて見つけたものや風景のドローイングがあります。

3 番目の部屋には、平面作品が展示されています。

最後の和室には、木彫の作品と白い作品が一緒に展示されています。

美術作家になったきっかけ。これまでの活動。

美術作家を目指したというより、なぜ作り続けているのかという話になりますが、今のような白い布の作品を初めて作ったのは学部生だった 2006 年からです。展覧会で作品を発表したり、本格的に作品をつくるようになったのは 2008 年、学部 4 年の 2010 年には韓国で個展を開きました。

卒業直後の 2011 年の 3 月に横浜で日韓合同卒展に参加したのが日本で初めての展覧会になります。
その展示から次に繋がり、ソウルと東京などでいろんな展覧会に作品を出すようになりました。

作品のモチーフや内容について。作品を制作する上で大切にしていること。

私は自分の生活が行われる場所やその中のものを作品のモチーフにしています。
2006 年、大学 1 年のとき、学生一人一人、それぞれ違う課題をもらった授業がありました。自分の課題はなんだったか覚えていないのですが、当時憧れていた女の子に、「めっちゃ散らかっている自分の部屋を描く」という課題が出されていて、私もそっちの方が良かったなーって思って。その子が描いた絵も先生のコメントもずっと覚えています。
少し時間が経って、2007 年のある日、すごく散らかって立つところもなくなった部屋をベッドの隅に座って
ボールペンで描きました。それが「日常」をテーマとした作品の始まりでした。
そして作家として活動する中で影響した大事な出来事がいくつかありました。

大学卒業の直後、日韓合同卒展に参加するために横浜に来ていた時、3.11 の震災がありました。観光で渋谷まで出かけていました。初めて地震を経験したので、地震っていつもこんなに揺れるのかって。当時は日本語もよく分からなかったので何が起こっているのか、何が起こったのかを理解するまで何年もかかりました。
そして 2014 年には韓国で船の沈没事故がありました。セオウル号という、修学旅行で高校生がたくさん乗船していた、仁川からジェジュ島に向かっていた船です。朝ニュースが出てから 1 日中テレビで船が沈んでいく映像が流れていて、その後も、亡くなった人たちが最後に家族に携帯で送ったメッセージや、遺族たちが亡くなった人について語るインタビューなどが、テレビでずっと流れていました。多くの韓国人が自分にできることが何もないという無力感と悲しみに落ち込んでしまった事故でした。

私もこうやって作品なんか作っていていいのか、これでいいのか、じゃあ何ができるかってすごく悩んでいました。
ですが、3.11 の後に震災で日常を失った人たちがいる中で、私の作品を見て「自分の日常を大切にするきっかけになるよ。」という感想を言ってくれる人がたくさんいたのを思い出しました。
そうか、私にできることは作品を作り続けることだって。
そこからは、ただ楽しくてやっているより、切実に作品をつくるようになりました。
人が普通に生きているってだけですごいことなんだよって。今生きている全ての瞬間が大切なんだよ、という思いを込めています。その他にも、友達だったり周りの人が自殺や事故でいきなり死んでしまったことが何故か結構ありました。私が部屋の中を描くきっかけになった、憧れの同級生も、事故で亡くなりました。
世界のいろんな事故、事件、人の死によって、その人たちの日常がなくなって、残された人の日常も変わっていくことについて考えるようになりました。

すごく敏感な人を「HSP(=Highly Sensitive Person)」といって、最近本などもたくさん出ているみたいですが、私も多分そういう人なのだと思っています。HSP は人の感情や気持ちに共感したり想像する能力も普通の人より強いと言われますが、そういう亡くなった人の気持ちや、残された人の悲しみとか、すごく想像しちゃって、怖くなっちゃったんですね。私の大切な人がいつどうなるかわからない。自分がいつどうなるか分からないという恐怖と不安に耐えるためにも、ずっと作品をつくらなきゃいけなくなったみたいです。

また、私が大学に入ってから日本に来るまでの間、住んでいた場所は、ソウルの中で一番ジェントリフィケーションが激しいところでした。建物やお店が急に無くなったり変わったり、ものすごいペースで変化し続けています。
今帰ったら迷子になっちゃいそうなくらい、好きな場所もどんどん壊されて、古いものはもちろん、町も人も、
いろんなものが消えていくのをずっと見てきました。

人が死ぬことだけじゃなくて、消えていくもの、消えていく時間、記憶などに過敏になってしまって、
今私が見ているものをできるだけ残そう、記録しようという気持ちが今のような作品になりました。
だいたい布の作品は部屋の中のものを描いたりつくったりしていて他にも散歩の途中に見たものも描いていますが、古い建物が多かったりするのも、やっぱり消えていくものに対しての思いですね。

手作業という行為について。

消えていくものや消えるかもしれないものを記録することに切実で、忘れないように何度も描いてしまうみたいですね。
英単語も漢字も、いっぱい書いて覚えるタイプでした。
紙に描いて、下絵を写して、ミシンで縫って、その上にまた手縫いもして繰り返し同じ絵を描きます。
立体作品の場合、実物を測りながら形を再現するのも、もっと私の中にその存在を残そうという行為かもしれないですね。

材料、技法について。

美術にいろんなジャンルがあるということをよく分かっていなくて、大学の専攻はファッションデザイン科を選んでしまいました。ものを作ることが好きで美大に入ったのに、デザインはちょっと違うってことを感じながら、漠然と立体の作品を作りたい気持ちがありました。でも得意だったのはミシンしかなかったので、ぬいぐるみみたいに綿をいっぱい詰めればいいじゃんという、単純なアイデアを試しにやってみたら「うまくいかなかった。けどなんかいいな。」ということが始まりでした。

10 年以上作品の見た目はあんまり変わっていないのですが、最初の 2、3 年ぐらいはただ作品を作ることが楽しくて続けていて、ちょっとかわいい感じの作品とかもありました。

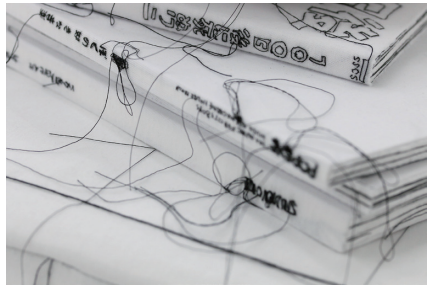
それがいくつかの出来事をきっかけに、考えていることや伝えたいことなどはだんだんと変わってきています。

色へのこだわり。白い布と黒い糸を使う理由。

例えば、ピンクの布団がある部屋を描いたら、ピンクがあんまり好きじゃない人はその作品を見て自分の日常を思い浮かべることは難しいと思います。私の作品を見て、もっと多くの人が塗り絵のようにそれぞれの思いを重ねて完成させてくれる、そういう作品をつくりたいと思っています。

ミシンを使った平面作品から立体への展開の中で、縫うことにこだらないという試みがありました。
もっと自由に形を表現するための実験をいろいろしました。

絵のような空間に、人が入って歩くとほつれている糸が少し揺れます。その小さな動きや、ひっぱると輪郭がなくなって、形がなくなりそうなイメージは、いつも当たり前のようにそこにある日常が一瞬でなくなるかもしれない存在であることの表現です。



日本に来たきっかけ。日本に来て変わったこと。

地震や津波など、災害の経験が多いので、この日常がいつなくなるかわからないという気持ちが日本人にはあると思います。韓国は地震だけは絶対にないとずっと言われていたので、韓国人はもっていない気持ちだと思います。
韓国より日本の方が、私の話にいろんな人が共感してくれて、分かってもらえて嬉しかったというのが大きい理由です。

韓国から離れてみたい、日本に住んでみたいと思っていたのと、作品についてもう少し研究がしたくて 2017 年に東京の大学院に入りました。それも私にとってすごく大事な出来事でした。いろいろ似ているようで違って、近いけど外から韓国のことを見れて、こっちでは外の人として日本のことが見れて、韓国で起こっているいろんなこと、韓国人のこと、自分のことを少し理解することができて、前とは少し違う目線でいろんなことを見られるようになったと思います。
まったく文化が違うアメリカやヨーロッパに行っていたらこういう経験はなかったんじゃないかなと思います。

また、自分の部屋ばかり描いているのと同じで、自分の中から自分だけを見ていたのが、外のことも見るようになりました。言語を覚えたつもりだったのに、考え方や文化の違いで伝わらないことなどを経験して、人はみんなそれぞれ違うってことがやっと分かってきた気がします。それで作品を通して何か伝えたいことがあるなら、もっと多くの人が共感するものをつくらないと、というのが大学院での私の研究テーマでした。急に木彫を始めたことなど、まだ自分でもちゃんと説明できないところもありますが、答えが出るまで続けてみようと思います。

コロナによる考え方や生活、作品などへの影響。

作品の見た目は変わっていないですが、いつ私の大切な人がいなくなるか、会えなくなるか、自分が死んでしまったら家族が悲しむだろうとか。そういう恐怖と不安がもっと大きくなりました。

今回展示している Amazon の段ボールやデリバリーのピザボックスみたいなところは、コロナを語っているとも言えますが、実はもっと前から作品にしているモチーフです。私が作っているものは変わっていないのに、世の中の状況によって少し違う意味を見つけることもある。今回の展示を準備している間に思ったことです。

尼崎の印象。新作の制作で影響のあったもの。

一応外国人なので、尼崎に関する知識や情報が無くて周りの人に聞いてみると、ダウンタウンの出身地、治安が良くないって言われました。マップやストリートビューで会場の周辺を調べて静かな場所なのかなという印象でした。

今回の展示に街の風景を展示したくて、実際来て歩いてみると、ほんの少ししか見ていないし、緊急事態宣言中で人と接する機会もなかったのでなんとも言えませんが、たしかに東京とは少し違うけど大きい差は分からなかったです。

ただ私はやっぱり古い建物に目がいっちゃうので、なんだろうと思って考えていました。消えるかもしれないものを記録しようという思いが強いということに気づきました。今まで言葉で説明できなかったいろんなことが、
今回尼崎を歩きながらやっとまとまった気がします。

今後について。

普通の人たちに喜ばれる作品をずっと作っていきたいと思います。
普通の人とか、よく言ってるけど、普通ってなんだろうとずっと考えています。人によっていろんな基準があって、誰かにはすごく美味しいものでも他の人にとっては普通だって言うこともありますし、
すごく特別な人でも、人混みの中にいると普通の人に過ぎないかもしれないです。

私は、ほとんどの人が普通の人なんじゃないか？と思いはじめました。自分もそのほとんどの人の中に入っていると思うと、ほっとします。そのほとんどの人と共感できるような作品を作り続けたいと思います。

まずはゆっくり、自分の見ているもの、私が思うことを描いていこうと思っています。

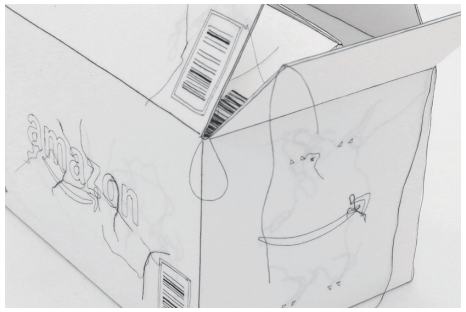
今回ベッドやソファなど家具の立体作品がありますが、それは日常生活を表現するための舞台みたいなものです。
これからその舞台でいろんな物語を作っていきたいと思います。同じ部屋での別の日の話のような。たくさんの日々を描いていこうと思います。新しい家族ができたり、社会の中で自分と違う人々に出会って、もっと外を見るようになって、そういったことから私が描いている内容が少しずつ変わるかもしれないですね。

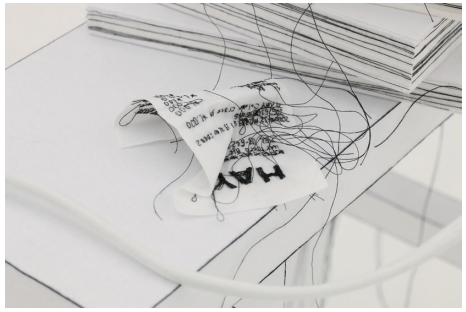
会場へお越しになられた方々へのメッセージ。

本日はお越しいただき、ありがとうございます。

この大変な時期に知らない街で展示することに不安もありましたが、「尼崎の人々に私の作品を見せたい」という言葉をいただいて、「よし。行こう。」と決めました。

こんな状況だからこそ、私の作品がみなさんの心の力になればと思い、今回の展示を準備しました。
ぜひ楽しんでください。





□ フライヤー・配布資料

普通の日

An Ordinary Day

YU SORA個展

2021年2月23日～3月31日

あまらぶアートラボ A-Lab Exhibition Vol.27

「普通の日」は続いてる

第27回目となるA-Labの展覧会は韓国出身のアーティストYU SORA（ユ・ソラ）の「普通の日」。彼女が近年取り組んできている作品は、原寸大の家具や電化製品などを真っ白な布と黒い糸で包み込む世界である。それらは、一見するとクールで非日常的な空間が広がっているように見える。

しかし、その空間に足を踏み入れると、なにかしら、人の息遣いと温かさ、優しさのようなものを感じる。それは、モチーフが、普段私達が目にしている身の回りにある見慣れたものということだからかもしれない。柔らかい布で覆われているということもあるかもしれない。布を縫うという手仕事、手触りを感じるからかもしれない。でも、根底に流れているのは、彼女が紡いでいる、生きている「普通の日」があるからなのではないかと思う。

そこには確かな日常があり、「生」がある。真っ白な布に黒い糸。色が着いていないそれらは、観た人が色を着けた「普通の日」を入れる容れ物の役割を持っている。今回、A-Labでは立体作品だけなく、布を支持体にした平面作品、木彫作品、そして尼崎の風景のドローイングなどが展開される。そこにはそれぞれの「普通の日」が流れている。

コロナ禍以降、新しい日常という言葉が聞かれるようになった。日常に新しいや古いという概念がふさわしいかわからない。しかし、スマートフォンでコミュニケーションを取り合うことは、わずか十数年前では日常ではなかったように、私達の日常が変わり続けてきたことは間違いない。
日常を作っているのは「普通の日」の積み重ね。日常が変わっても、そこに人は生きている。続いていく「普通の日」がそこにある。彼女の作品は縫い終わりの処理をしていない。そう、何も終わってない。「普通の日」はそれぞれの時間の中でずっと続いているというメッセージのようにも感じる。

A−Labは、1階が保育所であるように、人々が日常を過ごしているまちの中に埋没しているアートスペースである。生活感を感じる普通の場所でYU SORAが作り出す「普通の日」を感じて欲しい。

YU SORA（ユ・ソラ）

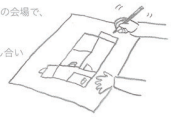
1987年生まれ。韓国、京畿道出身。弘益大学彫塑科を2011年卒業、東京藝術大学大学院 彫刻科 修士課程を2020年修了。白い布と黒い糸を使い、日常をテーマとした作品を作っている。家の中のものや姿を通して人の存在や生きている時間を語る。2010年からソウルと東京を中心とし、様々な展覧会に参加。日本での主な展覧会は「黄金町バザール2013」、個展「引越し」（YCC Gallery、横浜、2017年）、Tokyo Midtown Award 2018、ROPPONGI ART NIGHT2019など。

「帰るところ」サイズ可変インスタレーション、布・糸・紙、2020
（Photo by Hajime Kato）

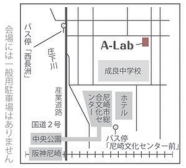
「帰るところ」枕，35x60x23cm、2019
（Photo by Hidehiko Omata）

無人ワークショップ「私たちの住んでいる家」

2019年六本木アートナイトで行われたワークショップの2021尼崎バージョン！日常を見つめ直す展覧会「普通の日」の会場で、参加者が自らの日常生活の場所を振り返り、住んでいる部屋の間取り図をそれぞれに描きます。
広さを間違えたり、描き忘れるスペースがあるかもしれません。
普段の生活の中で見ているからこそ、分からなくなってしまうこともあります。じっくり考えて描いたり、家族で話し合いながら描いたり、いつもの生活している場所の見方が変わるでしょう。そして、知らない誰かの部屋を覗き、どんな人か想像したり、共感したり、似ている人を探したりしてみましょう。



★新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、無人で行われます。ご自由にご参加下さい。



入場料無料 ｜ 月・水～金 午前11時～午後7時 ｜ 土・日・祝日 午前10時～午後6時 ｜

A-Labでは、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策に取り組んでいます。ご来場に際して、マスクの着用や手指の消毒など、皆様のご協力をお願いいたします。取り組んでいる拡大防止策についてはA-Labのホームページなどでご覧いただけます。

A-Lab あまらぶ アートラボ
http://www.ama-a-lab.com 兵庫県尼崎市西長洲町2−33−1
お問い合わせ A-Lab email：amalove.a.lab@gmail.com Tel・Fax：06-7163-7108
尼崎市役所文化振興担当 Tel：06-6489-6385 Fax：06-6489-6702

主催 尼崎市
協力 Baycom

普通の日

An Ordinary Day

YU SORA個展

2021年2月23日～3月31日

あまらぶアートラボ A-Lab Exhibition Vol.27

主催 尼崎市　協力 Baycom

YU SORA（ユ・ソラ）

1987年生まれ。韓国、京畿道出身。弘益大学彫塑科を2011年卒業、東京藝術大学大学院 彫刻科 修士課程を2020年修了。
白い布と黒い糸を使い、日常をテーマとした作品を制作。家の中のものや姿を通して人の存在や生きている時間を語る。2010 年からソウルと東京を中心とし、様々な展覧会に参加。日本での主な展覧会は「黄金町バザール 2013」、個展「引越し」（YCC Gallery、横浜、2017 年)、Tokyo Midtown Award 2018、ROPPONGI ART NIGHT2019 など。

room1

1.《普通の日》_ インスタレーション _ 布、糸、紙、プラスチック _2019~2021

倉庫

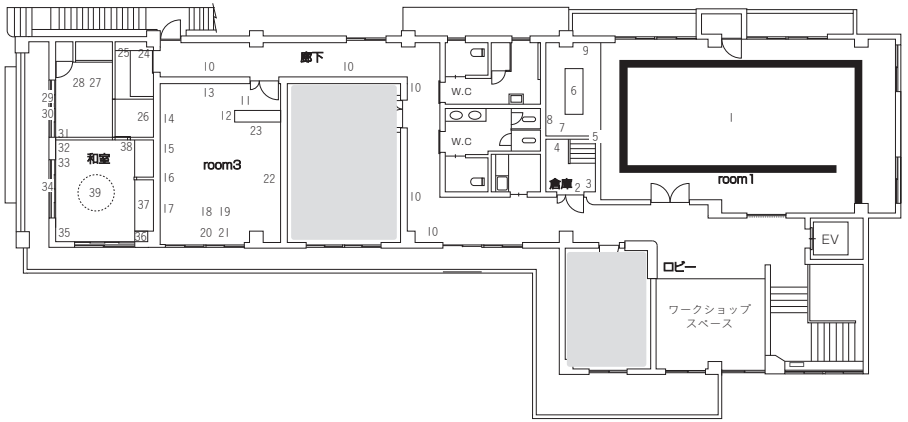
2.《key》_45x32cm_sikscreen_2017
3.《GRRN》_17x23cm_silk screen_2016
4.《「帰るところ」記録映像》_3 分 30 秒 _2020
5.《マツモトキヨシ》_42x30cm_ 紙にペン _2014
6.《日々を重ね、》_ 可変サイズ _ 紙にペン、アクリル板、積み木 _2007~2021
7.《ちっちゃなものたち》_23x17cm_silk screen_2016
8.《GRRN》_17x23cm_silk screen_2016
9.《my room》_17x23cm_silk screen_2016

廊下

10.《amagasaki_amagasaki》_ 1588x90cm _ 紙にペン、インク _ 2021

room3

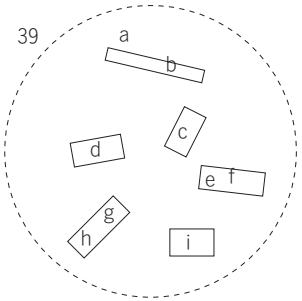
11.《新生活》_30x30cm_mixed media_2017
12.《スウェディッシュ・ドリーム》_12x12x4cm_mixed media_2021
13.《日常になった日》_160x160cm_mixed media_2017
14.《普通の日》_110x220cm_mixed media_2019
15.《普通の日》_110x220cm_mixed media_2019
16.《普通の日》_110x220cm_mixed media_2019
17.《普通の日》_110x220cm_mixed media_2019
18.《引き出しの中のものたち》_33x18x3cm_mixed media_2015
19.《yuzawaya》_14x23x26cm_mixed media_2014
20.《リトルマーメード》_24x25x16cm_mixed media_2021
21.《引き出しの中のものたち》_30x18x4cm_mixed media_2015
22.《普通の日》_360x250cm_mixed media_2018
23.《雨の日》_130x130cm_mixed media_2018



和室

24.《玄関》_24x10x7.5cm 一足 _ 檜 _2019
25.《玄関》_24.5x9x6.5cm 一足 _ 檜 _2019
26.《「普通の日」インタビュー映像》_20 分 48 秒 _2021
27.《かぎたち》_80x116cm_mixed media_2017
28.《かぎたち》_80x116cm_mixed media_2017
29.《sekaido》_15x7x23.5cm_mixed media_2014
30.《tokyu hands》_9.5x5x20cm_mixed media_2014
31.《my room》_36.5x52cm_mixed media_2012
32.《my room》_36.5x52cm_mixed media_2012
33.《my room》_36.5x52cm_mixed media_2012
34.《ピンクのものたち》_30x30cm_mixed media_2012
35.《普通の日》_21x12x97cm_ 檜 _2018
36.《フシディン》_8.5x4.8x3.8cm_ 檜 _2018
37.《なんでもない話なんだけど、》_ 可変サイズ _mixed media_2015
38.《帰るところ》_35x60x23cm_ 檜 _2019

39.
a《机の上のものたち》_8.5x5x14cm_mixed media_2012
b《机の上のものたち》_16x2x1cm_mixed media_2012
c《brillo》_26.5x10x13cm_mixed media_2021
d《くつした》_10.7x31x11cm_ 檜 _2019
e《机の上のものたち》_20x1.5x0.2cm_mixed media_2012
f《机の上のものたち》_15x1x1cm_mixed media_2012
g《モカポット》_13x9x18.5cm_mixed media_2012
h《机の上のものたち》_15.5x1.5x1cm_mixed media_2012
i《引き出しの中のものたち》_23x10x3.5cm_mixed media_2015



ロビー

無人ワークショップ「私たちの住んでいる家」

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.29
Exhibition vol.27「普通の日」
2022（令和 4）年 3 月　初版第 1 刷発行

発行 編集 制作　　尼崎市　文化振興担当
展示撮影　　荒井英一・YU SORA

A-Lab
あまらぶ アートラボ

尼崎市

お問合せ先

尼崎市　文化担当部　文化振興担当
TEL：06-6489-6385（A-Lab　06-7163-7108）
FAX：06-6489-6702
E-mail： amalove.a.lab@gmail.com